

_____の部分に will/would, can/could のどれを入れるかというインフォーマント調査を行い、下のようなパーセンテージで表した結果を得たという。

- (a) _____ you do me a favor? (友人に)
- (b) Excuse me, but _____ you tell me the way to the station? (見知らぬ人に)
- (c) _____ you tell the court your occupation? (証人に)
- (d) _____ you type this letter, please? (秘書に)

	will	can	would	could
(a)	13	20	23	44
(b)	4	36	14	46
(c)	33	4	56	7
(d)	18	15	38	29

明らかな違いは、命令の文脈では will/would が使われ、依頼の文脈では can/could が使われるということである。すなわち、could は丁寧な依頼で would は指示であることがわかる。しかし、インフォーマントの反応では必ずしも区別をしないあるいは別の反応をすることがあるのは数字を見ればわかる。

4.3 意味・統語的融合

八木 (1998 to appear a) で、英語の動詞補文の構造について論じたが、その中で、他動詞の補文としての that 節、目的語+to be+補語、目的語+補語の3つの形式の関係について詳しく調べた結果を述べた。生成文法でいわゆる「繰り上げ」(raising) と「to be 省略」(to be deletion) と言われる変形規則が関与した構文で、declare で例を示す。

- (66) a. I *declare* that the defendant is guilty.
- b. I *declare* the defendant to be guilty.
- c. I *declare* the defendant guilty.

ところが、that 節をとる動詞がすべて declare のようにどの形もとるとは限らない。例えば believe と think を比較してみると、

- (67) a. I *believe* that he is honest.
- b. I *believe* him to be honest.
- c. *I *believe* him honest.

- (68) a. I *think* that he is honest
- b. *I *think* him to be honest.
- c. I *think* him honest

のように、不揃いがある。詳細は八木 (1998 to appear a) をみていただきたいが、believe が *I believe him honest. の形がとれないのは、この構造のもつ「宣言」の意味を believe がもたないという意味上の理由によるものであり、think が *I think him to be honest. の形をとれないのは、think が直接の目的語 him をとれないという統語上の理由による。このような、特定の構文を動詞がとるかとならないかは、統語的な理由による場合もあるし、意味的な理由によることがある。これはすでにみた結果構文についても言えることで、このような現象を意味・統語的融合と言うことにする。

5 結語

以上述べたことを要約する。第一に、英語の研究は「言語理論派」の立場から行う場合と「個別言語派」の立場から行う場合があることを明らかにした。生成文法がわが国の英語学研究に入ってきてから、ここで言う「言語理論派」の研究方法が唯一正しいような錯覚を与え、わが国の伝統的な英語研究である「個別言語派」の研究が脇役になっていた。そこで改めて、それぞれが違った目的をもって研究をしていることを明確にしなければならない。

第二に、「個別言語派」においても「言語理論派」の影響をうけながら、理論的、論理的に整合した説明をする基本的な理論を確立する必要がある。そのひとつの形を、周辺的な英語の現象を具体的に分析することを通して提案した。

引用文献

- Barron, N. 1974. "The structure of English causatives," *Lingua* 33.
- Carrier, Jil & J. Randall. 1992. "The argument structure and syntactic structure of resultatives," *Linguistic Inquiry* 23.
- Chen, M. 1971. "English causative complementation: exploration in generative semantics," *Language Research Working Papers*.
- Chomsky, N. 1957. *Syntactic Structures*. Mouton.